

自画四季絵跋

夫大和絵は、そのかみ土佐刑部大輔光信がすさみに、堂上のうや／＼しきより、田家のふつゞかなるさま、岩木のたゞずまひ、やり水のめいぼく、これにはじまりて、末々にながれ、予が如き拙きまで、これをもとゝす、近非越前の産、岩佐の某となんいふもの、歌舞白拍子の時勢粧をおのづから写し得て、世人うき世又平とあだ名す、久しく世に翫ぶに、又房州の菱川師宣といふもの、江府に出て梓におこし、こぞつて風流の目をよるこばしむ、此道予が学ぶ所にあらずといへども、わかゝりし時、あだしあだ浪のよるべにまよひ、時雨朝かへりのまばゆきをもいははざる比に、岩佐菱川が上にたゞんことをおもひて、はしなきうき名のねざし残りて、はづかしのもりの、しげきことくさともなれり、さる中にあたりて、謫居さすらへし事、十とせにあまり、廿とせに近きをありがたき御恵みのめでたき、元の都に帰り来る、ある人むかしの筆の、四時のたはふれ絵を、ふたゝび予に見す、そのころは心たくましく、眼すゞろに髪筋を千筋にわくる、事くさもことたらざりけらし、しかし今の世のありさまにくらぶれば、髪のほどゑりをこえず、ふり袖大路をすらず、只あまさかる田舎、おさなき姿絵とも思ふべからん、蛸星のうつりかはりて、この一卷を見る事、浦島が七世のむまごに逢へるためにひきて、かつはよろこびをそふるの心にて、これがために跋す、